

幻魔対戦

今日 あした

丸子がお勝手で夕食の支度をしていると、庭の方から姑の千代のトーンの高い声が聞こえた。

「良夫、靴を夜まで出しっぱなしにしていると、目三つ小僧がやってきて持って行ってしまふよ。玄関に持って行きなさい」

「えー、目三つ小僧ってなあに？」幼稚園に通う次男の良夫が聞いている。

「良夫には分からないだろうね。ほら、下駄には鼻緒を通す穴が三つ空いていて目が三つあるみたいだろう、だから、昔の人は履物を暗くなるまで出しっぱなしにすると、下駄の妖怪がやってきて隠してしまふって言ったものだよ」

「へー」、そう言うと良夫は今脱いだばかりの運動靴を履いて玄関に回った。

「凄い！ おばあちゃん」腕白坊主を納得させるノウハウを心得ている。

丸子は、今日のおかずのコロッケに付け合わせるキャベツを刻みながらほとほと感心した。

丸子が、夫の邦夫の実家、室田家に住むようになってから一年が過ぎた。千代はケチの付けようが無い程良い姑だった。中肉中背で、目立たない外形ながら、いつも背筋をピンと伸ばし、微笑みを湛えていて隙がない。

この人には勝てないと思う。が、私はこの人があまり好きではない。

会社員の邦夫は帰宅すると、二軒長屋風に廊下でつながっている母屋に顔を出し、母親の千代に「ただいま」と挨拶に行く。

「なんで？」、丸子は思う。親の敷地に住んでいるからって、なにもそんなに遠慮しなくても……。

そんな日が続いたある日、母屋で「ただいま」「お帰り」の挨拶を交わした後、千代は、一緒にここに住むことになって建て増しをした私達の陣地までついて来て私の顔を見て、一瞬申し訳なさそうな表情を作り、わずかに会釈をして帰って行った。

これって余裕？ 千代は嫁の私の気持ちを察して息子が腰を据えて話込む前に送り届けたのだろう。私は思わず夫を睨みつけた。

「家族持ちのいい年をした息子に甘えられたら、母親だって迷惑よ」

「親を大事にしているだけじゃないか」夫も負けずに睨み返した。そして母親詣では終わりを告げた。私の勝ち？ いや、余裕の儀母の勝ち？

嫁の名前は丸子という。母親は、どんな教育をしたのだろうか。私は×子と呼ばたいのを日々我慢している。

春のうらかな日曜日だった。百花繚乱、オオムラツツジが紫色の大輪をつけ、薔薇も一斉に花開き、まだ茶色の芝生には緑色の草が生え始めている。

昼は邦夫がバーベキューをしてくれるそうだが、その前にみんなでぼつぼつ出てきた草を取ることにした。

と、主人の後ろで草を取っていた丸子が大きな声で

「わー、お義父さんに『おなら』をひっかけられたよ」と言いながら、邦夫の方に飛びつかんばかりに駆けて行って、大声で笑っている。

「丸子さん、臭かないだろう」主人が申し訳なさそうに言っている。

邦夫だつてどう答えていいのか困っている。はしたない、そんなことを人前で言うことないのに。

騒ぎが一段落して、ふと見ると、丸子が可憐に咲いているスマイレを根こそぎ抜いている。

「どうして？」あんなに綺麗な花を何故抜きたいと思うのだろうか。

「丸子さん、スマイレは抜かないで」

「はい」と返事は聞こえたが、腑に落ちない顔をしている。

「どうしたの」

すると、三つのさやになった部分を見せて

「ほら、ここを見て下さい。こんなにびっしり種があるでしょ、これがみんな芽を出したら草取りは大変ですよ」

「花と草は違うでしょう。丸子さんは理科の時間は大変だったでしょうね」

「あ、成績ですか？ いえ、私は律儀な性格だから、学校で習ったことは、すっかり学校に置いてきました」

私は情けなくて涙が出てきた。それを見て夫が

「母さん、泣くことはないだろう」と笑っている。腹が立つ。

夫は、息子の嫁の丸子のことは、明るくていい子じゃないかと言う。

私もそうは思うが全く違う人種について行けない。私は負けているのかしら？ でも…あんな子に？

四月になった或る暖かい日の午後だった。室田家ではそれぞれに会社、学校、友達の家にと出ていて、家に居るのは千代と丸子だけだった。

丸子は午後のひと時、編み物をしながらテレビで「科捜研の女」に見入っていた。すると、か細い声で、

「お隣の奥さまよ」と言っているのが聞こえる。テレビ画面からではない。だ

いぶ前から聞こえてきているような気がする。丸子は画面がコマーシャルになったので編み棒を置いて立ち上がった。

その時、千代が廊下伝いにやって来た。

「丸子さん、何だろうね、熊谷さんのおばあさんが何か言っているけど」

丸子は隣の熊谷さんのおばあさんに会った事が無い。

「お義母さん、私、お隣のおばあさんを見たことが無いけど、お婆さんがいらしたんですね？」

「ああそうね、私もご挨拶をしたことは無いけど何度かお見かけしたから、ああ、いらっしやるのだなと思ってたわよ。熊谷さんは四年前にここを買われて家を建てて引越してきたのよ。それまでは下町に居たそうよ。引越して来た時は、おばあさんは車椅子で中に入って行ったけど……つい最近、お嫁さんと二人で迎えに来たタクシーに乗るのを見たよ。それでちゃんと歩けるのだと思ったのを覚えてるよ」

熊谷さんの家は、ご主人が会社の社長で、社会人らしい息子と娘が一人ずつ、それにご主人のお母さんの五人暮らしたそうだ。

室田家は三十年もここに住んでいる。千代は月に一度は近所の人達と、巢鴨のとげぬき地蔵に行ってお参りをしている。そして、そこで買ってきた食べ物や並べてお喋りをするのを楽しみにしている。だから近所のことは何でも知っている。

でも、熊谷さんのことはあまり知らないらしい。

義父が言っていた。

「熊谷さんの嫁さんは良く出来た人だね。近所付き合いは挨拶程度だけど、留守の時荷物を預かると、必ずお礼を持ってくるのだよ。口数が少なく、礼儀をわきまえててしっかり者だよ」

丸子は、そうか、だから熊谷情報はお義母さん達のお喋り会の話題にならないのだと納得した。

「ちよつと外に出て見ようか？」千代が言った。

丸子は佳境に入った〈科捜研の女〉を諦めてテレビを切り縁側から外に出た。

千代も玄関に回って靴を履いて出てきた。

「お隣の奥さま、頼子が私を部屋に閉じ込めて出て行ってしまったのですよ。助けて下さい」。

私達が庭から見上げると、おばあさんは二階の北側にある腰の高さの窓から半身を覗かせて訴えている。

「奥さま、危ないからもう少し中にお入りになって下さい」千代が言う。

「どうか助けて下さい」

「お嫁さん、あ、頼子さんっておっしやるのですか……、閉じ込めるなんて、そんなことはなさいませんよ。御用でおでかけになったのでしょうか、もうすぐ帰ってお見えになりますよ」

「いいえ、朝早く出て行ったつきりで……」

「じゃあ、奥さまはお食事はどうなさったのですか？」

「持ってきたから食べましたよ」

「お昼ご飯は？」

「朝ごはんと一緒に、サンドイッチをお昼の分だと言って置いて行きました」

「それじゃあ、お腹はお空きではないですね。待っていていればじきお帰りになりますよ。ちゃんと朝とお昼のお食事を置いて行かれたのでしょうか、良いお嫁さんじゃないですか」

「良いもんですか、私は閉じ込められているのですよ。頼子がいないうちにここを出て行きたいのですよ」

「ここを出て、つてどこに行かれるのですか？」

「日暮りに帰るのですよ」

おばあさんと千代の話のやり取りを聞きながら、丸子はしきりに首をさすり、
小声で

「お義母さん、首が痛くないですか？ おばあさんはボケていて引越して来たことを忘れているのじゃないですか？」

「そうね」と千代は小声で言うと、再び上を見上げて、

「奥さま、鍵がかかっているから、私達には入ることが出来ないのです。頼子さんがお帰りにならないと、どうすることも出来ないのですよ」

「塀のところ長い梯子が横にして置いてあるでしょう、それをここに立てかけてくれませんか、植木屋が使う梯子だから大丈夫ですよ。奥さん、お願いします」とおばあさん。

「女の私達では、梯子を持ち上げることなんか出来ませんよ」

「若いお嫁さんもあるじゃないですか、ね、あなたなら梯子なんて簡単に持ち上げられるでしょう」

「いえいえ、とんでもない、この人のお腹には赤ちゃんがいるのです。重いものなんか持たせられません」千代が応える。

丸子はびっくりした。お腹に赤ちゃん？　こういうのもとつさの機転というのだろう。やはり千代には勝てないとおうか、歯が立たないとおうか、それにしても、丸子は首が痛くて上を向いていられない、それなのに、千代はず

つと上を向いたままで戦っている。

窓から顔を出しているおばあさんの表情が、とても悲しそうで、今にも泣きだしそうで丸子はちよつと可哀そうになったが、首が痛い方が先だ。

「お義母さん、もう家に入りましようよ」そう言うと、千代は「そうね」と小さく応えて、再び二階のおばあさんに向かって、

「奥さま、随分冷えてきましたよ、お風邪を召さないように、窓を閉めて下さい。遅くなりましたので、今日はもうお出かけにはなれませんかよ。頼子さんが帰って来るまで待ちましよう」。

下を向いて首を揉んでいる丸子は、本当に感心している。

「お義母さんは、なんて我慢強いのだろう、いつまで説得をするつもりなのだろう」

すると、二階の窓がぴしゃりと閉められた。丸子は、お婆さんはあきらめたのだろうと思い、

「良かったですね、お義母さん」と肩に手を置いて「もう入りましよう」と、母屋の玄関に向かった。

その時、再び隣の二階の、今度は東に面した窓が開いて、お婆さんの声が聞こえた。

「学生さん達、私はここに閉じ込められています。助けて〜」

東の窓は、熊谷さんの家の玄関の上にあり、道路に面している。

近くの私立の男子校の下校時間なのだろう。この道は通学路になっているのか、高校生が三々五々、駅の方向に歩いてくる。

熊谷さんの家の前には人だかりができています。千代は、状況を察するとすぐに道路に出て、生徒たちに

「何でもないので、貴方たちは気にしないで真つすぐお帰りなさい」と言って、生徒たちを誘導した。

そしてやっと家に入った。千代は家に入っても気が気ではないらしく、急いでトイレを済ませると、通路を通って若夫婦のエリヤに……。

「丸子さん、もうしばらく見ていきましょう、事故でもあったら大変だから……」もうダメ！と思つてソファで伸びていた丸子も渋々立ち上がった。

外に出て見たら、熊谷さんの家の二階まで梯子が伸びている。それも北側の窓に……。

おばあさんの訴えを聞いた高校生たちが、言われるままに梯子を架けたのだ。何人かの生徒たちがおばあさんの希望を叶えてあげたいと思つたのだろう。だが、おばあさんの希望を叶えて役目は終わったとばかりに誰もいなくなっている。

おばあさんは途方に暮れたように、窓に掛った梯子を触って下を見ている。北側の塀と建物の間は一メートル位で、梯子は急角度で下を見るだけでも怖いのには違いない。

「おばあさん、かわいそう」丸子は思わずつぶやいた。

「ねえお義母さん、おばあさんを降ろしてあげましょうか」

「まあ、丸子さん、自分の言っていることが解っているの？あんなお年寄りを……、怪我でもさせたらどうするの。私達にはどうすることも出来ないのよ」

「でも……」

「お隣の奥さま、梯子は出してもらいました。どうか、降りるのを手伝って下さい」再びおばあさんの声。

「いいえ、奥さま、女の私達では力がないので奥さまを支えきれません」

「それじゃああの学生さんたちの手を借りて、降ろして下さい。お願いします」

おばあさんの必死の形相を、丸子はとても見ていられない。

「お義母さん、降ろしてあげましょうよ、このままじゃ、飛び降りかねないですよ」

「丸子さん、何を言っているの、降ろしてからどうするの、日暮里に帰りたいて言われてもどうすることも出来ないのよ」

「降ろしたら、熊谷さんの家の人が帰って来るまで家で預かっていればいいじゃないですか。そうすれば、少しは落ち着くのじゃないかしら」

「だめよ、そんなの」

「でも、放っておくわけにはいかないでしょ。私が手を貸せば何とかできますよ」

「やめなさい丸子さん！ 無謀すぎます」

「大丈夫ですよ」

丸子は千代の制止も聞かず、隣の通用門から中に入って、室田との境の塀の根元から熊谷さんの北側の窓に伸びている梯子を見上げた。ほんの少し傾斜があるだけで、ほとんど垂直に近い。そこを運動靴で登って行った。

おばあさんは梯子を少し除けて窓から見ている。丸子は窓の所まで登って、「お隣のおばあちゃまこんにちは。私は隣の室田の嫁の丸子と言います。おばあちゃまを降ろしてあげたいけど、無理だわ。おばあちゃまも下を見たら恐いでしょう」

「でも、閉じ込められているので外に出ないと……」

「おばあちゃまは梯子なんて、上ったり下りたりしたことが無いでしょう」

「何度も上ったり下りたりしましたよ」

「お若い時のことじゃなくて……」

「少し前まで上り下りしていましたよ」

信じられない。年を取ってボケているから十年前も二十年前も、少し前なのだろう。だがやる気満々だ。これからまた説得するのはウンザリだ。丸子は大きなため息をついた。

と、その時、熊谷さんの通用門が開いて熊谷さんの奥さんがびっくりしたように丸子を見て、

「室田さん、何をしていますっしやるのですか、義母がどうかしたのでしょうか」

「あ、熊谷さん、お帰りなさい」丸子はそう言うとおばあさんに、

「おばあちやま、頼子さんがお帰りになりましたよ。良かったですね」と言い、帰って来たばかりの頼子に顔を向け、

「もう降りますから、お入りになっておばあちやまの所にいらして下さい」

「義母がどうかしたのでしょうか」

頼子は聞くまでは一步も動かないぞ、の態で門の中に立ち尽くしている。そこに千代が門を押し開けて入って、頼子さんの耳元で、

「熊谷さんの奥さま、お宅のお婆様がここから出してくれと、大騒ぎだったのですよ。かれこれ三時間になりますか……。嫁は優しい性格なので、見られないくてああして慰めているのですが……。奥様がお帰りになって本当に安心しました。どうぞお入りになってお婆様を見て差し上げて下さい」

「それはどうもご迷惑をおかけしました。でも、梯子沓かけて下さらなくても……。わざわざ梯子をかけて、家の上って慰めて下さるおつもりだったのでしょうか」

「いえ、順を追って説明いたしますが、一度お入りになってお婆様を安心させてあげて下さい。嫁も降りるに下りられなくて困っています。どうぞ……。」

結局、順を追っての説明は、熊谷さんの奥さんが出てくるのを待って、千代が一人で話してくれた。時間が時間だったから、主婦は大忙しだ。

そして次の日には、頼子さんが「ご迷惑をおかけしたお詫びです」と言っって神戸牛を一キロも持ってきてくれた。

義父は

「熊谷さんの奥さんは良く出来た人だ」としきりに言っている。

「そうですよ、あのお姑さんのお食事を全部作って持って行くんですって。偉いわね」

丸子はちよつと耳が痛かった。

邦夫と結婚した時、千代は邦夫に「嬉しいわ、一緒に住むようになったら、もう私は食事を作らなくて良くなるのね」と言ったそうだ。孝行息子の邦夫は、

「そうだよ、丸子は料理教室に今も通っているから、料理は任せてよ」

と言ったそうだ。だが丸子は頑として承知しなかった。

「邦夫さん、食事は別にしましょう、私はあなたや子供たちの好きなものを自分で作って食べるから、お義母さんも、義父さんと義母さんの好きなものを作って食べるように言ってます」

丸子がそう言ったのを、お義母さんはまだ根に持っているのだろう、「小さい奴！」と心の中で軽蔑した。そして現実に戻って、

「神戸牛なんて、凄いですね。これはやっぱり頭割りですよ。四対二で分けましょうよ」

「ああ」義父は生返事、二人とも苦虫を噛み殺したような顔をしながらも、千代が「そうだね、若い人たちは沢山食べて下さい」と、おどけながら言った。

千代、余裕の一勝！

一か月後、あんなことがあったのを忘れてしまいそうだった丸子が近所のスーパーで買い物をしていると、熊谷さんの奥さんに声を掛けられた。

「まあ、室田さんの若奥様、先日は色々、ご迷惑をおかけしました」

「いえ、あのく上等のお肉をたくさん、有難うございました。お婆様は落ち着かれましたか」丸子はちよつと苦手の頼子を前に、緊張しながら精一杯の挨拶をした。

「はい、お陰様で……。今、ヘルパーさんに見張りをお願いしているのですよ」。頼子はおどけて冗談交じりにそう言った。そして、

「室田さんの若奥様、えーとお名前は？」

「丸子です」

「まあ、優等生のお名前ね。丸子さんお買い物が済んだら、ちよつとその『リリー』でお茶を飲んでいきませんか、御用があたりでしたら断わって下さい」

「いえ、お昼は一人ですから……。もう買い物も終わりましたので、いつでも行かれます」

二人は、植木を沢山装飾に使っている、この辺りでは広々とした喫茶店リリーに腰を落ち着けた。お昼少し前で、客は誰もいない。

「私、お昼は一人だからスパゲティを食べちゃおうかな」丸子が言うと、

「あら、じゃあ、私もランチを頂いちゃおうかしら」と、頼子。

「おばあさまは大丈夫ですか？」

「お昼は置いて来たし、ヘルパーさんが私が帰る迄いてくれるから大丈夫なんですよ」そう言うと、頼子が店員にスパゲティランチを二人前注文した。

「先日はびっくりされたでしょう、義母は、玄関からふらつと外に出てしまっ

て迷子になってしまふのですよ。そんなことが何度かあつて、皆様にご迷惑をおかけしてしまうので……それで、私が出かける時は義母の部屋に鍵をかけることにしたのですよ」

「あー、それで……」

「ええ、我が家は大分前から、義母との幻魔対戦状態ですよ」

「え！ 幻魔対戦ですか」そう言つて丸子は身を乗り出した。

頼子からこんな言葉が飛び出すとは思ひもよらなかつた。

「義母は退屈なのでしようね、自分で思い込んだことをあれこれ妄想しては喧嘩を吹っ掛けてくるのですよ。まるで幻の悪魔に取りつかれたように！ そればかりか、私が出かけると、脱走を試みるようになったのです」

「思い込みと妄想との戦いで幻魔対戦！ それで行方不明なんて、迷惑な話ですわね」

「ええ、でしよう……、ですので、二階を改装して鍵を付けたのですよ。トイレには行かれるようにしましてね」

頼子はそのでいたずらっぽく笑つた。小柄で賢そうな顔立ちだがもう六十位だろうと丸子は踏んだ。

「必要な用事は家のものがある時にすれば済むことなんですけど、私にも精神衛生上、自由な時間が必要でしょう。義母との幻魔対戦に備えて！」

「わー、戦っているのですわね、頑張つて下さい！」

丸子は心の底からエールを贈つた。

ランチは頼子のおごりだった。

頼子さんは、溜まったストレスを、いつとき軽妙な冗談にしながら発散したのでらうな、と丸子はありがたくご馳走になった。

でも、幻魔対戦……？

「丸子さんお出かけだったの？」千代が廊下伝にやつて来た。

「はい」

「お昼は？」

「スープで頼子さんにお会いしたら誘われて、『リリース』でランチを食べてきました」

「今、二人で親しそうに話しているのを見て一緒だったのかなと思つたのよ。

でも、近所付き合いはね、あまりしない方が良いわよ」

「はい」。

丸子は、自分だって毎月近所の人とお地蔵さんに行くのに！ という言葉を呑み込んだ。

「誘われたって？　どんなお話だったの？」

「ああ、お婆さんを閉じ込めて出かけたのは、お婆さんが一人で外出して迷子になったことがあったから、誰もいない時に外に出てしまうと困るのですって」

「そのお話は、あの後、聞いたわよ」。

「そうですか、ああ、私はあの時はすぐに家に入ってしまったから知らなかった」

「丸子さん、家のことをご近所の人にペラペラお話するのは止めなさい」

「家のことをペラペラなんて喋りませんよ」

「私はね、親戚や近所の人に、丸子さんは良い嫁だって常々言っているでしょう、でも、良い嫁だなんてちつとも思っていないのよ」

「じゃあ、なんでそんな嘘をつくのですか」

「そう言っておけば、あなたが馬鹿なことをしても大目に見てくれるでしょう、邦夫の嫁がよそのお宅の梯子をのぼるような真似をしても……」。

あの時は大変だったのよ、熊谷さん、あ、頼子さんっていうのね。あの方に、梯子を使ってよその家をのぞき込むなんて非常識じゃないかって、すごい剣幕で言われたのよ。

私も頼子さんが怒るのももつともだと思っただわ。だから、謝っておきましたよ。嫁は優しい子だからお婆様が悲しそうなので慰めたかったですよ、申し訳ございませんって。せめてそう言わなくては収まらないでしょう。

人と話すときは本音と建て前をわきまえなくてはね。今日だって貴方は、何でもかんでもべらべら喋って来たのでしょ、嫌だわ」

「えーっ、お義母さん、ありもしないことを憶測しないでくださいよ」と言いながら、丸子は、義母は平気な顔をして嘘ばかりついているのだと思った。

それに頼子さんが怒っていたなんて、信じられない！

“わぁ、どこもかしこも幻魔対戦だぁ”

完

(8,500字)